

# 八代集の「はるかなり」について

## —形容動詞と和歌(5)—

謝  
静

はじめに

古典和歌には形容動詞の使用数が乏しいことが指摘されている。その中で、八代集に用いられた形容動詞「はるかなり」の用例は四十例ある。<sup>(1)</sup>これは相対的に多い数とみなせるが、その理由は何だろうか。それを考えるために、八代集で「はるかなり」がどのように用いられているのかを概観したいと思う。

具体的な用例の考察に先立ち、まず、『小学館古語大辞典』と『日本国語大辞典 第二版』において、その語義がどのように説明されているかを確認しておこう。

○『小学館古語大辞典』

〔形動ナリ活〕

① 空間的に遠く隔たっているさま。遠くかすかだ。

○『日本国語大辞典 第二版』

〔形動〕

〔一〕空間的に遠く隔たっているさま。

〔二〕時間的に遠く隔たっているさま。また、時間的に長いさま。

〔三〕心理的にいちじるしく隔たっているさま。差違のはなはだしいさま。

(1) 近づきがたく隔たっているさま。奥行のあるさま。深遠。

(2) 縁遠いさま。また、あえて遠ざけるさま。

(3) 心が進まず、自分に関係のないものと思うさま。

(4) 程度がはなはだしいさま。

このように、辞書の記述において、「はるかなり」の意味用法は、空間的隔たり、時間的隔たり、心理的隔たりの三つに大別されており、心理的隔たりについては、さらに細かく分類されていることがわかる。

こうした語義把握を踏まえながら、八代集に用いられた「はるかなり」の用例を抽出し、概観を試みたい。以下、部立により、四季の歌、恋の歌、その他の歌の順に、用例を挙げ検討を加える。

#### 一 四季の歌

四季の歌において、「はるかなり」の用例は八首あり、すべて空間的な隔たりを表現したものと判断される。それはさらに、聴覚による隔たりの把握と、特に感覚によらない隔たりの把握とに分けることができる。先に前者の例から見ていることにする。

・をとほ山けさ越えくればほととぎすこずゑはるかに今ぞなくなる

(古今集・夏・一四二・紀友則・「音羽山を越えける時に郭公の鳴くを聞きてよめる」)

・秋風にさそはれわたる雁が音は雲はるかに今日ぞきこゆる

(後撰集・秋・三五五・読人しらず・「題しらず」)

・帰る雁雲居はるかになりぬなりまた来ん秋も遠しと思ふに

(後拾遺集・春・六八・赤染衛門・「帰る雁をよめる」)

・一声はさやかになきてほととぎす雲路はるかにとをさがるなり

(千載集・夏・一五九・前右京権大夫頼政・「時鳥の歌とてよめる」)

よめる」)

・夜をこめて明石の瀬戸をこぎいづればはるかにをくるさを鹿の

声

(千載集・秋下・三一四・俊恵法師・「夜泊鹿といへるこ

ろをよめる」)

この五首は、郭公、雁、鹿の鳴き声を詠んでいて、「をとほ山：」「帰る雁：」「一声は：」には、聞こえてくる音をもとに推定する意を表す助動詞「なり」が用いられ、「秋風に：」詠には「きこゆる」、「夜をこめて：」詠には「声」が詠まれていて、すべて聴覚に基づく歌であることがわかる。

「をとほ山：」詠、「秋風に：」詠は、郭公が音羽山の梢のはるか向こうで鳴く声が聞こえることと、北国に帰る雁の声が空のはるか所から聞こえてくることを、それぞれ詠んでいる。

「帰る雁：」詠と「一声は：」詠は、はるかに遠ざかって行く雁や郭公の鳴き声を詠んでいる。「夜をこめて：」詠では、対象では

なく泳者自身が明石の瀬戸を漕ぎ離れて行き、それをはるか後ろから送る鹿の鳴き声を詠んでいる。

以上の五首の歌で、「はるかなり」は聴覚に基づいてとらえられた空間的隔たりを表現している。その一方で、「をとほ山：」詠、「秋風に：」詠では、郭公の声や初雁の声を「今」「今日」初めてはるか遠くに聞きつけたことの喜びが示され、「帰る雁：」詠、「一声は：」詠、「夜をこめて：」詠には、雁、郭公、鹿の声が離れていくことの寂しき、悲しさが示されている。このように、「はるかなり」は語義としては空間的隔たりを意味しているが、心情の表現にも関係していることが知られる。

・東路をはるかにいづる望月のこまにこよひや逢坂の関

(金葉集・秋・一八四・源仲正・「駒迎の心をよめる」)

・月みればはるかに思ふ更級の山も心のうちにぞありける

(千載集・秋上・二八〇・右おほいまうち君・「皇太后宮大

夫俊成十首歌よみ侍ける時、よみてつかはし侍けるうち月の歌」)

・はるかなるもろこしまでもゆく物は秋のねぎめの心なりけり

(千載集・秋下・三〇二・大弐三位・「題しらず」)

右の三首で「はるかなり」は、空間的な隔たりを、視覚や聴覚などのような特定の感覚とは関係なく示している。

「東路を：」詠では、はるか遠くの東国から上ってくる望月の駒を、東から上ってくる望月のイメージに重ね合わせて表現している。

「月みれば：」詠、「はるかなる：」詠では、「更級の山」「もろこし」がはるか遠くにあることを意味し、その実体としての空間的隔たりと、心にとっての隔たりのずれを対照して詠んでいる。<sup>3)</sup>

## 二 恋の歌

恋の部立てには「はるかなり」の用例が十首見られる。

そこで「はるかなり」が示している隔たりは、九首が空間的隔たり、一首が時間的隔たりである。特徴的なのは、その隔たりを、恋の主題に関連する何らかの心理的隔たりと結びつけて表現した歌が多いことである。実体としての隔たりそのものを表現した歌は、次の二首にとどまる。

・かくばかり常なき世とは知りながら人をはるかに何たのみけん

(後撰集・恋二・六一五・平時望朝臣・「文かよはしける女

の異人に逢ひぬと聞きてつかはしける」)

・たまほこの道ははるかにあらねどもうたて雲井にまどふ比かな  
(新古今集・恋四・一二四八・朱雀院御歌・「女御の下に侍けるにつかはしける」)

「かくばかり」詠の、「はるかに…何たのみけん」は、「どうして遠い将来を期待していたのでしょうか」（新大系）の意。新大系は上記のように解しながら、「はるかに」に注を付して「文かよはして」ただけであるから、空間的に離れているという意」と記す。

これは、時間的にも空間的にも「はるかに」の意と解しているものと思われるが、「常なき世」との対比から考えて、時間的な隔たり・長さだけを読み取るのがよいと思う。

「たまほこの…」詠の「はるかに」は、作者が愛する女御の部屋との空間的な隔たりを表現しており、あなたと同じ宮中にいて、道はるかではないが、ということを表している。

残りの八首で「はるかなり」はすべて空間的隔たりを表現しているが、それがどのように心理的な隔たりと結びつけられているかを確認しよう。

・逢ふことは雲居はるかになる神のをとにききつつ恋ひわたる哉

（古今集・恋一・四八二・貫之・「題しらず」

・ちはやふる神にもあらぬ我が仲の雲井邊に成りもゆく哉

（後撰集・恋六・一〇二五・読人しらず・「女の男を厭ひて、

さすがにいかがおぼえけん、言へりける」

この二首で「はるかなり」は、雷が鳴る場所がはるか遠くの空であるという空間的隔たりを意味するとともに、相手との心理的距離

の表現にもなっている。

「逢ふこと…」詠は、男の立場から女との逢瀬を遂げること願う歌で、「はるかなり」は「遠く離れての意と遠くて逢えないの意を掛ける」（新大系）。

「ちはやふる…」詠は、男を厭うているが別れることには未練のある女の歌で、「はるかなり」は、雷との関係で「雲が居るような遠い所」意味し、同時に男と疎遠になっていく心理的隔たりも表現している。

・雁が音の雲をはるかに聞えしは今は限の声にぞありける

（後撰集・恋三・七七七・読人しらず・「あひ知りて侍りける人のまうで来ずなりて後、心にもあらず声をのみ聞くばかりにて、又音もせず侍りければ、つかはしける」

この歌で、「はるかなり」は、雁の鳴き声が遠くの空に聞こえるという空間的隔たりを表現しているが、その声を別れを告げる声とみなして、恋人と疎遠になって「心にもあらず声をのみ聞くばかり」になった心理的隔たりと関連づけている。

・思やる境はるかになりやするまどふ夢路に逢ふ人のなき

（古今集・恋一・五二四・読人しらず・「題しらず」）  
・遥なる程にも通ふ心哉さりとて人の知らぬ物ゆへ

（拾遺集・恋四・九〇八・伊勢・「題しらず」）  
・雲井なる人を遙に思ふには我が心さへ空にこそなれ

（拾遺集・恋四・九〇九・源経基・「遠き所に思ふ人を置き  
侍て」）

この三首では、詠者が思う相手がいる位置を示す言葉として、「境」「程」「雲井」（詞書の「遠き所」の比喩）が用いられている。「はるかなり」は、その場所との空間的な隔たりを示すとともに、相手との心理的な隔たりも表現している。

・かひなきはなを人しれず逢ふことのはるかなるみのうらみなり  
けり

（後拾遺集・恋三・七三〇・増基法師・「物へまかりけるに、  
鳴海の渡りといふ所にて人を思ひ出でてよみ侍りける」）

この歌では、「なる身の恨み」に「鳴海の浦」を詠み入れ（新大系）ており、「はるかなり」は、恋人との心理的隔たりと、都から遠く離れている空間的な隔たりをとともに表現している。

・はるかなる岩のはざまに独りゐて人目おもはで物思はばや

（新古今集・恋二・一〇九九・西行法師・「題しらず」）

この歌の岩のはざまは、都や人里から遠く離れた場所を示している。「はるかなり」は、その空間的な隔たりを示すとともに、恋する相手との心理的隔たりも表現している。

### 三 その他の歌

四季の歌、恋の歌以外の部立に収められた歌は二十二首（重複を除く）で、ここでは「その他の歌」に分類することにする。この用例数をさらに部立（主題）別に分類すると、次のようになる。

離別歌 六首  
羈旅歌 三首  
賀歌 二首  
雑歌 八首  
哀傷歌 一首  
神祇歌 一首  
釈教歌 一首

以上のように、離別歌と雑歌の用例が多く、四季歌・恋歌に匹敵し、次に羈旅歌、賀歌も、勅撰集における収録歌数から見て、相対的に多い数と判断される。このような傾向は、「はるかなり」という語と、それぞれの主題が親和性を有することを反映しているのだから。以下、部立ごとに歌の傾向を概観する。なお哀傷歌の用例は内容的には釈教歌なので、釈教歌と合わせて検討することとする。

〔離別歌〕

・雁がねの帰るを聞けば別れ路は雲井はるかに思ふばかりぞ

（拾遺集・別・三〇四・曾禰好忠・「ものへまかりける人の  
もとに、人々まかりて、かはらけ取りて」）

・はるかなる旅の空にも遅れねばうら山しきは秋の夜の月

（拾遺集・別・三四七・平兼盛・「源公貞が大隅へまかり下り  
けるに、関戸の院にて月のあかりけるに、別れ惜しみ侍て」）

・たびたびの千代をはるかに君や見ん末の松より生の松原

（後拾遺集・別・四七四・相模・「源頼清朝臣、陸奥国果て  
て、また肥後守になりて下り侍りけるを、出立ちの所に、誰  
ともなくてさしおかせける」）

・思ひ出でよ道ははるかにぬらん心のうちは山もへだてじ

（後拾遺集・別・四八四・源道濟・「かたらふ人の陸奥国に  
侍けるに」）

・逢ふことは雲居はるかにへだつとも心かよはぬ程はあらじを

（後拾遺集・別・四九三・祭主輔親・「女に陸ましくなりて、  
程もなく遠き所にまかりければ、女のもとより、雲居はるか  
に行くこそあるかなきかの心地せられると言ひて侍りける返  
り事につかはしける」）

・たち別れはるかにいきの松なればこひしかるべき千代のかげか

な

（詞花集・別・一八五・権僧正永縁・「修理大夫顕季大宰大  
式にてくだらむとし侍けるに、馬に具していひつかはしけ  
る」）

「はるかなり」は、「たびたびの…」詠を除く五首で、詠者と相  
手との空間的隔たりを表現している。同時に、「雁がねの…」詠で  
は、「雁の行く方の遠さに、友人の行き先の遠いことや、再会の時  
期の遠いことをも込める」（新大系）と指摘されるように、時間的  
な遠さも表現されている。また、「たち別れ…」詠でも、「はるかに  
生きの松」というつながりで、「はるかなり」が時間的な長さも表  
している。

「別れ路は雲井はるかに思ふ」「はるかなる旅の空」「道ははるか  
に」「逢ふことは雲居はるかにへだつ」「たち別れはるかにいき」と  
いう表現は、遠く別れることの悲しさ、寂しさの表現にもなってい  
て、「はるかなり」という語が、離別という主題によく適合してい  
ることを示している。

これに対して、「たびたびの…」詠は、「末の松」「生の松原」か  
らの連想で、相手の長寿を祝う気持ちで「千代をはるかに君や見ん」  
と歌っている。「はるかなり」は、後で見る賀歌と同様に、時間的  
な隔たり、長さを表現している。

〈鞆旅歌〉

・都出でてて雲居はるかに来たれどもなを西にこそ月は入りけれ

(後拾遺集・鞆旅・五二七・藤原国行・「筑紫にまかりて、

月の明かりける夜よめる」)

・わたの原はるかに浪をへだててみやこに出でし月を見るかな

(千載集・鞆旅・五一六・円位法師・「世を背きてのち修行

し侍りけるに、海路にて月を見てよめる」)

・わたの原しを路はるかに見たせば雲と浪とはひとつなりけり

(千載集・鞆旅・五三〇・刑部卿頼輔・「家に百首歌よませ

ける時、旅の歌とてよみ侍ける」)

右の三首で、「はるかなり」は空間的な隔たりを表現している。

このうち、「都出でて…」詠と「わたの原はるかに浪を…」詠では、都からの空間的隔たりを表現していて、鞆旅という主題に「はるかなり」が親和性をもつことをうかがわせる。これに対し、「わたの原しを路はるかに…」詠では、遠く広い海の眺望を表現するために「はるかなり」が用いられている。

〈賀歌〉

・千歳まで折りて見るべきさくら花梢はるかに咲きそめにけり

(千載集・賀歌・六一一・堀河院御製・「同じ御時后宮にて、

花契週年といへる心を、うへの男どもつかうまつりけるに、

よませ給うける」)

・白雲に羽うちつけてとふ鶴のはるかに千代の思ほゆるかな

(千載集・賀歌・六二四・二条院御製・「うへの男ども百首

歌たてまつりける時、祝いの心をよませ給うける」)

「千歳まで…」詠は、「遠景の空間の奥行の深さに時間の永遠性を重層させ、たけ高い歌とした」(新大系)と評されている歌で、「はるかなり」は空間的な遠さと時間的な長さをともに表現している。

「白雲に…」詠は、「天空まで見晴らせる空間的明視の序は、下句で時間的永続の明視の表現に転ずる」(新大系)と評されるように、やはり空間的な広がりや遠さと時間的な長さをともに表現している。

「はるかなり」という形容動詞が、時間的な長さを表現する言葉であることは、賀歌の主題にとっても適合している。また、この言葉が、空間的な隔たりと時間的な隔たりをともに表現できることが、二首の和歌の趣向にうまく生かされている。

〈雑歌〉

・梓弓はるかに見ゆる山の端をいかでか月のさして入るらん

〔拾遺集・雑下・五三三・能宣・「月を見待りて」〕

・天の原はるかにわたる月だにも出づるは人に知らせこそすれ

〔後拾遺集・雑三・九六八・藤原道信朝臣・「内より出でば

かならず告げむなど契りける人の、音もせて里に出でにければつかはしける〕

・淡路にてあはとはるかに見し月の近きこよひは所からかも

〔新古今集・雑上・一五一五・躬恒・「題しらず」〕

・天の原はるかに独りながむればたもとに月の出でにけるかな

〔新古今集・雑上・一五一七・増基法師・「夜ふくるまで寝られず侍りれば、月の出づるをながめて」〕

・ふけにけるわが身のかげを思ふまにはるかに月のかたぶきにける  
〔新古今集・雑上・一五三六・西行法師・「題しらず」〕

この五首では、東の山から出て来て、大空を渡り、西の空に傾いていく月と、それが浮かぶ大空が詠まれていて、詠者と月との空間的な隔たりや空の広がりや、「はるかなり」が示している。空や月を眺める歌と「はるかなり」という言葉が親和性をもつことがうかがえる。

・難波がた潮路はるかに見たせば霞に浮かぶをきの釣舟

〔千載集・雑中・一〇四九・円玄法師・「眺望の心をよめる」〕

海岸から遠くの海を眺望した歌で、空間的な広がりや遠さを「はるかなり」が表現している。先に検討した鞆旅歌、

わたの原しを路はるかに見たせば雲と浪とはひとつなりけり

〔千載集・鞆旅・五三〇・刑部卿頼輔・「家に百首歌よませける時、旅の歌とてよみ侍ける」〕

と発想・表現が似ていて、千載集の時代に、海を「はるかに」眺望する歌が好まれていたことが想像される。

・敷島や 山との歌の 伝はりを 聞けばはるかに 久方の 天  
津神世に 始まりて 三十文字あまり 一文字は 出雲もの宮  
の 八雲より をこりけるとぞ しるすなる ……

〔千載集・雑下・一一六二・崇徳院御製・「百首歌めしける時、よませたまうける」〕

・時知らぬ 谷の埋木 朽ちはてて …… 君に心を かけしよ  
り しげき愁えも 忘れ草 忘れ顔にて 住の江の 松の千歳  
の はるばると 梢はるかに 栄ゆべき ときはの陰を 頼む  
にも 名草の浜の なぐさみて ……

〔千載集・雑下・一一六三・待賢門院の堀河・「同じ御時百首歌たてまつりける時の長歌」〕

「はるかなり」は、「敷島や…」詠では、和歌の歴史の長さを表現し、「時知らぬ…」詠では、崇徳院の治世が永遠に続くことを祝つ



ていて、ともに時間的な長さを表現している。「時知らぬ…」詠では、「松の千歳の　はるばると　梢はるかに」というつながりで、空間的な広がりも示している。<sup>(4)</sup>

〈神祇歌〉

・道とをしほどもはるかにへだたれり思ひをこせよわれも忘れじ  
この歌は、陸奥に住みける人の、熊野へ三年詣でんと願を立ててまいりて侍けるが、いみじう苦しかりければ、いまふたたびをいかにせんと歎きて、御前に臥したりける夜の夢に見えけるとなん。

（新古今集・神祇歌・一八五九・読人しらず・「題しらず」）

これは、熊野に参詣していた人の夢に熊野権現が表れて詠んだという歌であるが、「はるかなり」は参詣者の住む陸奥と熊野との空間的な距離を表している。一首の発想としては、

・逢ふことは雲居はるかにへだつとも心かよはぬ程はあらじを  
（後拾遺集・別・四九三・祭主輔親・「女に睦ましくなりて、程もなく遠き所にまかりければ、女のもとより、雲居はるかに行くこそあるかなきかの心地せらるれと言ひて侍りける返り事につかはしける」）

に類似していて、空間的な隔たりと心にとつての隔たりとのずれを表現している。

〈哀傷歌・釈教歌〉

・暗きより暗道にぞ入ぬべき遥に照せ山の葉の月  
（拾遺集・哀傷・一三四二・雅致女式部・「性空上人のもとに、詠みて遣はしける」）

・つねよりもけふの煙のたよりにや西をはるかにおもひやるらん  
（新古今集・釈教・一九七三・相模・「二月十五日の暮れ方に、伊勢大輔がもにつかはしける」）

「暗きより…」詠の「はるかなり」は、月については空間的な隔たりを表し、性空上人への願いとしては、煩惱の闇に迷い込む自分と、仏法の尊さとの間の懸隔を表現している。「つねよりも…」の「はるかなり」は、西にあると信じられた極楽浄土への空間的遠さを表現するとともに、浄土へのあこがれを表している。

このように右の二首で「はるかなり」は、空間的隔たりを示しながら、心理的な隔たりも表現している。

## おわりに

今回の考察を通し、八代集において「はるかなり」は、いくつかの点で、和歌の主題や表現に用いるのに適していることが確認できた。

四季の歌では、遠くの空で郭公や雁が鳴くのを初めて聞きつけた感慨や、雁、郭公、鹿の鳴き声が遠ざかるのを悲しむ心情を詠むにあたって、「はるかなり」が有効に使用されていた。また、はるか遠くに思いをはせる心情も詠まれていた。

恋の歌では、なかなか逢えない状況や疎遠になっていく状況を、「はるかなり」によって表現していて、主題との親和性が見られた。表現や趣向の面でも、空間的隔たりと心理的隔たりを結びつけて表すことを「はるかなり」が可能にしていた。

その他の歌でも傾向は同様であった。離別歌、羈旅歌では、空間的な隔たりを表す「はるかなり」と、別れ・旅という主題が、自然に結びつく様子が確認された。賀歌では、時間的な長さを表して祝意を示すことに「はるかなり」が有効に用いられていた。

全体として、「はるかなり」で表される隔たりや長さが、実体としても好んで詠まれ、また心理的な隔たりと重ねることも多用されていた。

## 注

- (1) 『八代集総索引 和歌自立語篇』(一九八六年、大学堂書店)によれば四十一例。拾遺集三四七番歌と金葉集三四〇番歌は同一の和歌なので、これを減じた。
- (2) 八代集の引用は、『新日本古典文学大系』による。以下、同叢書に言及する際は、「新大系」と略す。
- (3) 「月みれば……」詠の「更級の山も心のうちにぞありける」という表現について、「更級の山も心のうちにあるのだと思うことだよ」(新大系)、「更科山の月も遠国ではなく心の中に存在していることになるなあ」(和泉古典叢書)というように、逐語訳的な解釈が行われているが、「わが心なぐさめかねつ更科やをばすて山にてる月を見て」(古今集・雑上・八七八・よみ人しらず)との関連を考え、「古人が更級の山を見た時と同様、私の心も目の前の月を見て切なくて慰めかねることだ」と解するべきだろう。
- (4) 新大系は、「千歳まで折りて見るべきさくら花梢はるかに咲きそめにけり(千載集・賀歌・六一一・堀河院御製)の「梢はるかに」の注において、「……ここでは梢が遙か遠くまで連なる様を叙する表現。一二六三も同じ」と記して、二首の歌に見られる「梢はるかに」の意味が一致していることを指摘している。

(しえじん 本学大学院博士課程後期課程在学)